

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム  
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—  
報告書

アジア・アフリカにおける持続型基盤の発展に寄与する  
ものづくり研究の可能性

派遣者：金子 守恵

派遣期間：2014年5月30日～6月14日

派遣先：国際民族生物学会（ブータン）

キーワード：エンセーテ、自然資源、コミュニティ、協働、観光

### 1. 研究課題について

アジア、アフリカに暮らす人びとは、地域の自然環境、コミュニティ内の社会関係、さらには外部との交流にあわせて、日々の生活に必要なもの（＝日用品）をつくりだしてきた。この研究では、ローカルな技術的实践とグローバルな環境変化や社会的な制度が交差する場としてのものをつくる身体（技法）に注目し、コミュニティにおける知（＝在来知）の共有と配分の過程を描き出すことによって、アジア・アフリカにおける持続型生存基盤の発展に寄与することをめざす。具体的には、①調査研究、②共同研究／協働、③研究発信の3点に留意して研究課題を遂行する。今年度は、①エンセーテの生産や消費、交換に関わる知や技法についての調査研究、②エチオピアにおける博物館での特別展示に関する共同研究、そして③国際ワークショップや派遣先機関でのセミナーや講演会での発表を中心に研究発信をおこなう。

### 2. 派遣の内容

2014年6月1日～6月7日にかけて、ブータンで開催された国際民族生物学会に参加発表した。今回の渡航は、今年度計画している研究活動のなかでも、③派遣先機関でのセミナーでの研究発信をおこなうことにあたる。国際民族生物学会は、2年に一回開催されており、今回は14回目の会議であった。56カ国から約360人の外国人参加者とおよそ100人のブータン人の参加者が、ブータン東部にあるブムタンのUWICEに参集した。口頭発表のセッションとポスター発表のセッションがあり、派遣者はポスター発表のセッションにて発表をおこなった。これまでとりくんできた、エチオピア西南部で栽培されているバショウ科植物エンセーテの生産と利用およびそれらをめぐる知の継承と近代教育の浸透に関わる調査結果をもとに、コミュニティのメンバーたちととりくみはじめたエンセーテの繊維を利用した製品製作活動についての成果を発表した。

### 3. 派遣中の印象に残った経験や体験

派遣者は、今回はじめてブータンを訪問し、はじめてこの学会で発表する機会を得たが、以下の2点がとくに印象に残っている。（1）参加者の関心の広さと深さ（2）ブータンにおける自然資源の保護と利用を中心にすえた国づくり。（1）については、派遣者の発表を通じた学術的な交流において痛感した。参加者は、おもに海外でフィールドワークをおこなっている植物学者や動物学者のほか、自然保護や自然資源の管理などにかかわる役人や国際機関の職員などもいた。日本の学界ではあまり注目されないような、マイナーな植物やテーマに関して精通していたり、関心をもっている研究者が多く、

派遣者が今回発表の中心にすえたエンセーテの繊維という限定的なものに関しても、熱心に話をきいてくれる参加者が多かったのが非常に印象的であった。

(2)については、国際会議自体が、国をあげてのイベントとしてとらえられていたことがなにより驚きであったが、それ以上に強く印象に残っているのが、自然資源の保護と利用を中心にすえて国づくりにとりにくんでいる点であった。会議の特別セッションや会議の後に準備されたブータン国内のエクサカーションにおいて、それらの取り組みが映像資料や講演などで紹介されたり、実際に体験することができた。これにくわえて、会議に参加したブータンの各省庁の行政官たちはどの方も、ブータンの国としての特徴がゆたかな森林資源を保持している点にあること、環境保全やその利用、さらにはそれらをつかった観光開発を中心に国づくりに取り組んでいく必要があることを熱心に説いてくれた。派遣者が訪ねたことのある途上国の多くが、環境保全の重要性はみとめつつも、優先順位が低くなりがちであるなかで、ブータンのとりにくみは非常に印象的であった。

#### 4. 目的の達成度や反省点

今回学会が開催されたブムタム地域は、ブータンの国際空港があるパロや首都のティンプーから離れた場所にあり、バスで一日かけて移動しなければならないため、参加者がまとまってブムタムへ移動し、その後、学会事務局がかりあげた複数の宿舎に参加者が分散して宿泊し、それぞれの宿舎で寝食をともにしながら会議に参加することとなった。派遣者は、国際会議以外の場でも、参加した外国人研究者の方たちと派遣者の研究テーマや現在の関心についてじっくり話をしたり、意見交換をすることができ、通常国際会議以上に学術的な交流ができた。ポスター発表では、1時間半という限られた時間ではあったが、ウガンダ、アメリカ、イギリス、フランス、台湾、タイ、中国、カメルーンなど、非常に多くの国の方々に、エンセーテというエチオピア起源植物と、それをめぐる現代的な状況、さらには調査結果をふまえたうえでとりにくんでいるコミュニティのメンバーとの協働活動について、じっくり話をきいてもらうことができた。この点で当初の目的を達成できたと考えている。

#### 5. 今後の派遣における課題と目標

最終年度である今年は、来年2月に予定している国際シンポジウムのセッションを組織するため、エチオピアとフランスへ、セッションの打ちあわせと研究発信、さらにはこのプログラムが終了後も継続して研究活動や学術交流をつづけていく可能性を模索することも渡航の目的にすえる予定である。セッションの打ちあわせについては、今回の国際学会の渡航においてえられた知見を生かしながら、セッションのテーマをより精緻化していきたいとかがえている。その際、院生や研究員など、より若い研究者にも参加してもらえよう工夫をとりいれたいと考えている。



写真1 Kent 大学 Dr.Pui の組織したセッション。会場に集まった参加者は、気候変動に対する人類学の関わりの可能性について議論した。



写真2 各国の伝承を紹介する story telling のセッションも組織された。写真中央の女性は、ブータンの伝承について語っていた



写真3 会議の最終日にはブータンの各地域のコミュニティが生産している農産物や工芸品が展示された。